

留京三首における人麻呂の方法

——留守歌の系譜と流離の歌枕——

上野理

1

持統天皇は、持統六年三月六日から二十日にかけて、伊賀・伊勢・志摩を巡行した。その時、都に留まった人麻呂は『留京三首』を詠むが、その三首には地名がていねいに詠みこまれている。

網の浦に船乗りすらむをとめらが珠袋の裾に潮満つらむか

(1—40)

釧着く答志の崎に今日もかも大宮人の玉藻刈るらむ (四一)

潮騒に伊良湖の島辺漕ぐ船に妹乗るらむか荒き島廻を(四二)

第一首の「網の浦」は、親しい地名ではなく、人麻呂がなぜ詠みこんだか、問題となるところだが、巻十五の遣新羅使が「所に當りて誦詠する古歌」中には、

安胡乃宇良に船乗りすらむをとめらが安可毛の裾に潮満つらむか
(15—36—10)

とあるので、「網の浦」の原文「嗚呼見乃浦」の「見」は「見」の誤写とも考えられるが、巻十五の「古歌」には左注があつて、

「柿本朝臣人麻呂の歌に曰はく、『安美能宇良』、又曰、『多麻母能須蘇尔』といへり」とあるので、誤写とすれば相当に古い時代のこととなり、誤写説を主張するのも困難となる。

沢瀉久孝は、『万葉集注釈』に、「網の浦」を鳥羽市小浜、「答志の崎」を答志島の崎、「伊良湖の島」を神島とし、つぎのようにいふ。

私は過日その地に至り、その景觀に接し、その浜に立つ海人をとめたちに聞いたのであるが、その小浜の北部をサトと呼び、南部をアミの浜と呼んでゐる事は確かであり、その浜に立つて沖を見ると、真正面に浜と相對したものが答志の崎であり、その答志の島のも一つ先に、私がいらごの島でないかと云つた神島が見え、その又彼方には三河の伊良湖岬が遠く霞んでゐる。次の作の答志とその次の作のいらごと、そして今の作のあみと、三首の歌枕が見はるかす一直線の上にあるといふあまりにも好都合な景觀がそこに実在してゐる事を確めた。

「網の浦」が鳥羽市小浜に相当することを確認し、三首の歌枕が一直線上に存在することを発見した沢潟の喜びは、快く読者の心にひびき、今日多くの支持を受けているが、人麻呂はどうして「網の浦」という特殊な地名を出発点に選び、一直線にならぶ歌枕をうたいこむのであろう。持統四年九月の紀伊行幸のうちに伊勢まで足をのびたりして曾遊の地であったので、三つの歌枕について深い知識を持っていた、というのも、なぜ、それをうたいこんだかを説明することにはなるまい。天皇や大官人の動靜は、都にいる人麻呂たちにも知らされていたかもしれないが、大官人たちは『留京三首』にうたわれたように、はたして網の浦を船出し、答志島に上陸して玉藻を刈り、さらに、神島・伊良湖岬に船を進めたであらうか。

壬午（一七日）に過ぎます神郡、及び伊賀・伊勢・志摩の国造等に冠位を賜ひ、并て今年の調役を免し、復、供奉れる騎士・諸司の荷丁・行宮造れる丁の今年の調役を免して、天下に大赦す。但し盜賊は赦例に在らず。甲申（一九日）に、過ぎます志摩の百姓、男女の年八十より以上に、稻、人ごとに五十束賜ふ。乙酉（二〇日）に、車駕、宮に還りたまふ。到行します毎に、輒ち郡県の吏民を会へて、務に勞へ、賜ひて榮作したまふ。甲午（二九日）に、詔して、近江・美濃・尾張・參河・遠江等の国の供奉れる騎士の戸、及び諸国の荷丁・行宮造れる丁の今年の調役を免す。詔して、天下の百姓の、困乏しくして窮れる者に稻たまはらしむ。

右に『日本書紀』持統六年三月の条を引用したが、三月二十九

日の詔に、近江・美濃・尾張・參河・遠江等の東国の騎士や荷丁、行宮造宮に奉仕した丁の今年の調役を免除する、とあるので、東国の人々の奉仕を受けたことは明らかだが、通過したのは、十七日の行賞の記事に見える伊賀・伊勢・志摩の三国である。十九日には、通過した志摩国の八十歳以上の老人に稻五十束を賜う、とあり、伊賀・伊勢を除外しているのは、志摩の滞在が長く、志摩に親しみを抱いた理由によるうか。五月六日の条には、「阿胡行宮に御しし時に、贊進りし者紀伊国の牟婁郡の人阿古志海部河瀬麻呂等、兄弟三戸に、十年の調役・雜徭を服す。復、挾抄八人に、今年の調役を免す」とあるので、紀伊に近い志摩の阿胡にまで足をのびたことがわかる。

持統の伊勢行幸は、実際には海景を楽しむ遊覽的要素の濃いものであったろうが、巡行の主目的は、政治的なものと考えねばなるまい。壬申の乱で天武天皇は、伊勢神宮を祭る東国の勢力を味方につけることで勝利を迎えたため、天皇は即位後伊勢神宮を庇護し、天武三年十月九日には大来皇女を斎王として伊勢神宮に奉仕させ、四年二月十三日には十市皇女・阿閉皇女を神宮に参赴させているが、天武は伊勢神宮に深い信仰を寄せたのであろう。朱鳥元年四月二十七日には、病氣平癒を祈願させるため、伊勢に多紀皇女・山背姫王・石川夫人を派遣している。持統の伊勢行幸は、こうした天武の伊勢信仰を継承するものであろう。さきにあげた三月十七日の条においても、伊勢の度会・多気の両郡を神郡として特別に待遇し、閏五月十三日には伊勢神宮の申請をいれて、神郡からの赤良曳荷前御調糸の献上を免除している。

『太神宮諸雜事記』は、持統四年と同六年に、内宮と外宮の遷宮祭の行われたことを、「即位四年庚寅、太神宮御遷宮。同六年壬辰、豐受太神宮遷宮」と記す。紀伊行幸の持統四年を内宮の遷宮祭の年、伊勢行幸の持統六年を外宮の遷宮祭の年とのちに考へ、推定したものかもしれないが、持統六年が壬申の乱後二十一年目に相当するのも、なにか意味ありげである。「二所大神宮例文」は、持統四年の内宮遷宮に注して、「自此御宇、造替遷宮被_レ定置廿年。但大伴皇子謀反時、依天武天皇之御宿願也」というが、これは事実というより伝承であり、伝承というより後世の推測であろうが、この推測を外宮に及ぼすことも不可能ではあるまい。持統の行幸は、天武の伊勢信仰を継承し、しかも、外宮の第一回の遷宮（あるいは創設）に関連したものではなかったろうか。

伊勢行幸に際して、三輪朝臣高市麻呂の有名な諫止事件がある。「農時を妨げたまふこと」をその理由としているが、理由はただそれだけであろうか。古賀精一氏は「大神朝臣高市麻呂考」（石井庄司博士喜寿記念論集『上代文学考究』）に、北山茂夫氏の「持統天皇論」（『日本古代政治史の研究』）や守屋俊彦氏の『日本靈異記の研究』を引用しつつ、つぎのようにいう。

北山茂夫氏は、この行幸の意図を、藤原京造営を控えて、地方豪族に恩威を示すという政治的效果をねらったものと解釈し、一方、高市麻呂をかく行動させたものについては、「高市麻呂の単独の直諫の行為を内面から支えた思想は、儒教ふうな王者観であったとされていいであろう。」という。書紀

の文章、懷風藻の關係作品などから推せば、そのとおりであるが、三輪山の神を奉ずる大神朝臣という出自を考慮に入れるならば、「彼をして真にあのように熱情的に駆りたてたものは、実は田の神や水の神の子孫としての血の誇りであったとみた方がよいのではあるまいか。」とする守屋俊彦氏の見解も、高市麻呂の内面に一步ふみこんだ解釈として、併せて考えるべきことであろう。さらに、伊勢の新しい神に対する三輪の古い神の側からの抵抗という解釈も、天武紀・持統紀にみるかぎり、伊勢・大倭・住吉・紀伊・龍田風神・広瀬大忌神などが重んじられているのに対して、三輪神はほとんど無視されているに近いという事実からして、一考すべきことであろう。

持統の伊勢行幸を外宮の祭礼に関連させれば、高市麻呂の諫止はさらに理解しやすいものになろう。外宮の祭神は豐受大神で、天照大御神の御饌都神だが、同時に五穀の生産や衣食住の守護神であり、神格において、出雲系の神々である、大年神・宇迦御魂・御年神・大戸比売神等の農耕神・殖産神と共通する。大和において出雲系の神社を代表する三輪神社が新しい宗教政策に重大な関心を寄せ、三輪神社を代表する三輪高市麻呂がその政策に反対し、最後まで抵抗したのではないか。農耕・殖産の神を祭ろうとする天皇が、農作に重要な時期に行幸して、その妨げをするのは矛盾ではないか、と諫止するかたちで。

持統の伊勢行幸が、伊勢神宮と関連の深いものであり、聖地巡礼の意味あいをもつとすれば、志摩にも、伊雜宮・粟島大蔵宮が

あるので両社への巡礼も考えられ、そこから、志摩の中心地である阿児の国府に向うことも不自然ではないが、答志島・神島・伊良湖岬はこうした巡礼すべき聖地ではない。風光明媚な土地であり、遊覧し、磯遊び船遊びをしたと考えるべきであろうが、これらの海域は、潮の流れも速く、女帝が磯遊び、船遊びをする場としてかならずしもふさわしくはない。

2

人麻呂は宮廷歌人でありながら、行幸に供奉せず、都に留まって『留京三首』を短歌で詠んだ。この三首が、なぜ、特殊な歌枕を詠みこんだか、実際の行幸や人麻呂の体験とどのようななかかわりを持つか、といった問題はやはり、作品に直接尋ねるべきであろう。なぜ、天皇の行幸を長歌でうたわず、「をとめ」「大宮人」「妹」の船旅や海浜での姿を想像するか、ということも問題にしてよいであろう。人麻呂は、三首にひとしく「らむ」を使用し、現在の彼女たちの姿を空想するが、こうしたことは、同じ行幸のうちに、当麻真人麻呂妻の詠んだ歌にもみえる。

(1) 我が背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ
(1—143)

海とは無縁な歌だが、このように、現在、夫はどこそこを旅しているという歌は集中に少なからず取められている。

(2) 朝霧に濡れにし衣干さずしてひとりか君が山路越ゆらむ

(9—166)

(3) あさもよし紀へ行く君が真土山越ゆらむ今日ぞ雨な降りそね

(一六八〇)

(4) おくれるて我が恋ひをれば白雲のたなびく山を今日か越ゆらむ

(一六八一)

(5) 秋風の寒き朝明を佐農の岡越ゆらむ君に衣貸さましを

(3—136)

(6) 山科の石田の小野の柞原見つつか君が山道越ゆらむ

(9—173)

(7) 草陰の荒蘭の崎の笠島を見つつか君が山路越ゆらむ

(12—192)

(8) 玉かつま島熊山の夕暮れにひとりか君が山路越ゆらむ

(3—193)

(9) 息の緒に我が思ふ君は鶏が鳴くあづまの坂を今日か越ゆらむ

(3—194)

(2) は斉明四年(六五八)紀伊行幸時の作者未詳歌、(3)(4)は大室元年(七〇一)一〇月の持統・文武行幸時の後人歌、(5)は赤人

(6)は字合の歌、(7)~(9)は卷十三「悲別歌」中の作者未詳歌である。(4)(6)には旅人を羨やむ心がうたわれているが、他は山越えの難儀を思いやったもので、(2)の「朝露に濡れにし衣干さずして」、(5)の「秋風の寒き朝明を」、(8)の「夕暮に」、(2)(8)の「ひとり」はさらに悪条件の重なったことを憂慮するかたちをとる。

山越えの歌ではないが、左の歌も同趣の歌と考えてよからう。

(10) 流らふるつま吹く風の寒き夜に我が背の君はひとりか寝らむ

(1—159)

(11) 神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に

(4—5〇〇)

(2) 梅の花散らす春雨いたく降る旅にや君が庵りせるらむ

(10—191—18)

(3) 十月しぐれの雨に濡れつつか君が行くらむ宿か借るらむ

(12—131—13)

(4) 葦辺には鶴がね鳴きて湊風寒く吹くらむ津乎の崎はも

(3—135—2)

(1) は普謝女王、(2) は基檀越妻の歌。(3) は「春相聞」の「寄雨」中、(3) は卷十二の「問答歌」中の作者未詳歌。(4) は若湯座王の歌である。みな、悪天候のもとの旅や旅宿を案じる妻の歌であり、(4) の場合は異論もあらうが、旅人を思う留守の歌と考えてよからう。こうした諸例は、夫が難所を越えたり、悪天候に見舞われたと推測されるおりに、留守の妻は旅の難儀をおもいやる歌を詠む習慣が存在したことを推測させる。

(5) 二人行けど行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ
(2—1〇六)

(6) たまきはる字智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野

(1—1四)

(7) 風吹けば沖つ白波たつ田山夜半にや君がひとり越ゆらむ

(『伊勢物語』)

(8) は悲劇を秘めた大伯皇女の歌、(9) は和歌上はじめての反歌として注目される中皇命の歌だが、ともに留守歌の発想を採用し、(6) の場合はその形式を借りつつ舒明天皇の朝狩への出発を賀する歌にしているのは、留守歌の成立の古さを推測させるし、『伊勢物

語』「つつゐづつ」の(7)の存在も、留守歌の詠法が後世にまで広く行われていたことを物語っている。

「つつゐづつ」で女の詠む(7)の歌は、『古今集』(18—九九四)

や『大和物語』(二四九)にも見え、『古今六帖』には物語はないが、一帖と二帖に「かぐ山の花の子」「かこの山の花子」の作として重出する。大和国で語られた民話系列の物語だが、『伊勢物語』ではこの歌を女は、「いとようけさうじて」詠んだといい、『古今集』では、「琴をかき鳴らしつつ」詠んだという。女が化粧し、琴にあわせてうたう歌であり、留守の妻が夫の安全を祈念する神事のおりに詠む歌のごとくである。

人麻呂の『留京三首』もこうした留守歌の発想をうけて、「をとめ」「大宮人」「妹」の船旅や海浜での姿を想像する。『万葉集古義』が、第一首・第二首を、「女房はつねに簾中にこそ住むものなるに、たまたま御供奉りて、心もとなき海辺に月日経て、あらかし島回に袈裟を潮にぬらしなど、なれぬ旅路やなに心地すらむ」と想ひやり憐れみて詠めるなるべし、「海人こそ常に刈らめ、大宮人の刈らむは思ひがけぬわざなれば、いかにわびしくやあらむ」と思ひやりたる意なり」と、なれぬ旅路や思ひがけぬ労働に同情した意と解するのは極端にすぎるとしても、作品にひそむ憂慮をまったく無視してしまうのもどうであらう。

斎藤茂吉は『柿本人麻呂』(評釈篇卷之上)に、第一首を「この一首の気持は、楽しい朗かな声調で、さういふ若い美しい女等に対する親愛の情が充滿ちてゐる」と評し、窪田空穂は『万葉集評釈』に、第二首を「行幸の路順を思うと、人麿も知っていたらう

と思われる手節の崎が浮かんでくる。そこに想像されることは、大宮人の、海人の生業の一部である藻刈りをまねて興じている光景である。海に憧れている大宮人には、これはきわめて珍しく楽しい遊びで、人麿も、それを想像すると、心躍るものがあつたといえる」と評す。

茂吉や空穂のように、第一首・第二首に憂慮を認めず、供奉の女官が舟遊びをし、海藻を刈って遊んでいる姿を空想し、羨ましが心を表現した、と考えるのが通説となっているが、第三首の不安は、突然にきざしたのではなく、第一・二首の明るい憧憬や羨望のなかにも一沫の不安を宿し、「をとめ」や「大宮人」を作者に強くひきつける働きをしてはいないだろうか。

人麻呂は、伊勢行幸に供奉せず、都に留まって留守歌を詠むこととなった。当麻真人麻呂妻のように、女たちが夫の旅の安全を祈念するなかで彼も留守歌をうたおうとして、現代が女帝の時代であり、多数の女官たちが行幸に供奉したことを考えたとき、世界が逆転したように感じ、本来旅をするはずの男が留守をし、留守をするはずの女が旅にあるようにすべてが倒錯して見えたのをおもしろく思い、倒立した留守歌の制作を意図したのであろう。

旅にある夫を案じる留守の妻の歌は、旅にある妻を案じる留守の夫の歌に変化し、山越えに対する憂慮は、海浜や海路に対する憂慮に変えられ、その憂慮も単なる憂慮ではなく、風光明媚な志摩の船遊びや藻刈りに関する憂慮に置きかえられ、直接的には明るい憧憬や羨望に逆転していた。人麻呂は、行幸に供奉した美しい女官たちの姿を明るく具象的に描き、留守をする人麻呂の羨望

を伝えながら、憂慮を伝える留守歌の文脈は、波に濡れはしないか、うまぐ玉藻が刈れるか、海は荒れていないか、というかたちで、一沫の不安を添えて作品に陰影を与え、行幸に供奉せず留守をした官人たちの思いを自己に引きつけていた。この時、女官たちは彼の恋人や妻に等しいものに変身していたことはいうまでもないし、実用的な留守歌が人麻呂によって文学作品として飛翔したことも説明を要するまい。

『万葉集』中には、左の六首のごとき歌もあるが、(4)(5)のように航海を思いやる歌や、さきにあげた(4)(6)や(7)(8)のように、旅に出られぬことを残念がり、旅人が美しい光景を見、楽しい体験をしていることを羨む歌は、人麻呂の『留京三首』がなくては、生まれなかった、と考えてよからう。(9)は黒人、(10)は小舟、(11)は金村の歌、(12)(13)は旅人の「後人追和之詩三首」である。

(4) いづくにか船泊てすらむ安礼の崎漕ぎたみ行きし棚なし小舟

(1一五八)

(9) 高島の阿渡の湊を漕ぎ過ぎて塩津首浦今か漕ぐらむ

(9一七三四)

(10) ……真土山 越ゆらむ君は 黄葉の 散り飛ぶ見つつ నికి
びにし 我は思はず 草枕 旅をよろしと 思ひつつ 君は

(4一五四三)

(12) 松浦川川の瀬速み紅の裳の裾濡れて鮎か釣るらむ

(5一八六一)

(13) 人皆の見らむ松浦の玉島を見ずてや我は恋ひつつをらむ

(八六二)

(2) 松浦川玉島の浦に若鮎釣る妹らを見らむ人のともしき

(八六三)

3

答志島や神島・伊良湖岬にかりに行幸したとするならば、磯遊びや遊船びをする遊覧のために行幸した、ということになるうが、往復十八日という日程や『日本書紀』の記載から考え、伊良湖岬までは行かなかった、と考えるのが自然であろう。久松潜一も『万葉秀歌』(一)(講談社学術文庫)に「あみの浦や手節の崎からはやや距離があるが、この辺りまで船で行くのもあったであろう。ただこの行幸の時に行かれたかどうかはわからない」とい、大養孝氏も『万葉の旅』(仲)(現代教養文庫)に「京にいる人麻呂はすでに知っているこの海景を思いえがいて、三首目にはつきりと「妹」をあらわし、動的展開的な春の海上に場面を転じて、妹のいる遠い潮の音を思いやっているのだ。かならずしも一行が急潮の伊良湖水道を小舟で乗りきる危険を冒しているわけではない」とい、高安国世氏も『万葉のうた』(創元新書)につきのようにいう。

伊良湖は志摩半島から対岸にあたる渥美半島の先端で、答志の島から伊良湖までは近距離ではありませんが、海流が早くて船遊びには適しないそうです。だから、重大な用件で東国へ渡ったのでなければ、これはただ人鷹が空想で作ったという事になります。実際に危険というほどでなくとも、相当荒い海潮を乗り切って漁夫らにこがせる船の中に、自分の思

う女人も心細そうに乗っている様子を思いやる方が真実味があっていいようですが、この時の巡幸に、そこまで渡れたかどうかはわかりません。

「伊良湖の島」がかりに神島であったとしても、伊良湖岬に渡るのでなければ、どうして神島の海域に船を進める必要があったであろう。神島の周辺もなかなかの難所で、吉田東伍の『大日本地名辞書』は、『日本水路志』を引用して、神島の項に「四面險絶、泊船の地なし、又島の四周は海底險惡にして近づく可らず、北側に一小村あり、島北は即ち伊良湖水道にして、潮水奔流す」、菅島の項に「神島より菅島に至る間には、数多の岩礁列布し、且潮流強きを以て舟人甚之を恐る」という。

「伊良湖の島辺」に船を進めた、というのは人麻呂の空想で、実際にはそうしたことはなかった、となるようだが、同様なことは、「網の浦」での乗船や「答志の崎」での玉藻刈りについてもいえる。人麻呂は、なぜ、それぞれの土地でそうしたことをした、というのであろう。

「答志の崎」について、答志島のいづれかの岬と考えられ、とくに異説はないが、答志郷のいづれかの岬、答志郡のいづれかの岬、と考えることも不可能ではない。答志郷は、答志島・坂手島・神島・菅島等の島羽東海に羅列する島嶼の諸村をいい、答志郡は、答志郷をはじめとして、伊気郷・神戸郷・伊可郷・伊雑郷・磯部郷を含み、養老三年以前は、英虞郡をも含み、「答志」は志摩の別名であった感が深い。「答志の崎」は志摩東海の岬であり、答志郡答志郷の答志島の黒崎などと特定の岬をうたっているわけ

ではあるまい。

「答志の崎」を答志島の岬と限定できなくなると、どこにでもありそうな「網の浦」を小浜に比定することもまた困難になるう。三つの歌枕が一直線に存在する、という説は魅力のあるものだが、視点を定める論拠を欠くようだ。

三つの歌枕がなぜ詠みこまれたか、の問題も『留京三首』の方法に即して考えるべきであろう。人麻呂は、伊勢行幸が遊覧の要素の濃いもので、志摩で磯遊びや船遊びが行われることを知っていたらう。彼が女官たちに対する羨望と一沫の不安を留守歌の形式を借りてうたおうとすれば、山越えの難所をうたう留守歌にあわせて、志摩の海の難所をうたわねばなるまい。伊勢志摩は最大の難所である「伊良湖の島辺」が第三首にうたわれたのは、そうした理由によるのであらう。「伊良湖の島」は、また、麻績王の物語によって、不安や旅愁とともに甘美なものを誘う流離の歌枕となっていた。

麻績王の伊勢国の伊良湖の島に流さるる時、人、哀しび
傷みて作る歌

うちそを麻績王海人なれや伊良湖の島の玉藻ります

(1—123)

麻績王、これを聞きて感傷して和ふる歌

うつせみの命を惜しみ波に濡れ伊良湖の島の玉藻刈りをす

(2—124)

伊良湖岬に向う船の出る港は、われわれの常識では鳥羽がよく、「答志の浦」となるはずだが、志摩の中心地は、国府のある

阿児であるので、阿児が起点となり、第一首で船は「阿児の浦」を出発するのであらう。第二首は、第一首の「阿児の浦」と第三首の「伊良湖の島」の中間、志摩国の東端がうたわれねばならず、「答志の崎」が選択されよう。答志は、志摩の別名ともいえるほど広範囲の土地を指すが、主としてその東部の地をいう。

麻績王の物語について、いま深入りする気はないが、麻績部・神麻績部・若麻績部の諸氏が活躍する東国を流離する物語であつたらうか。麻績王は、伊勢の麻績連・神麻績連と関連を持つ皇族であらうから、その流離譚では伊勢を経由しようとし、主人公に八難を与えるために、通常の経路とはことなる峻険な道が選ばれたかもしれない。伊勢から伊良湖岬へも陸路をとらずに水路が選ばれ、伊勢から志摩へ、志摩から伊良湖岬へと流離する物語であったかもしれない。

をとめらが 麻笥に垂れたる 績麻なす 長門の浦に 朝な
ぎに 満ち来る潮の 夕なぎに 寄せ来る波の その潮の
いやすますに その波の いやしくしくに 我妹子に 恋
ひつつ来れば 阿胡の海の 荒磯の上に 浜菜摘む 海人を
とめらが うながせる 領巾も照るがに 手に巻ける 玉も
ゆららに 白たへの 袖振る見えつ 相思ふらしも

(13—132—134—135)

反歌

阿胡の海の荒磯の上のさざれ波我が恋ふらくはやむ時もなし

(33—134—135)

右に引用したのは、巻十三所収の詳細不明の「雑歌」だが、男

は「長門の浦」の対岸に立つて故郷の妻を思っていると、「阿胡の海」の荒磯の上では、浜菜を摘む海人の少女たちが、彼に向って袖を振り、領巾や手玉をゆらす、という。「長門」を長門国と結びつける解釈もあるので、伊良湖に流される麻績王流離譚と直結させることはためらわれるが、「をとめ」が麻笥に垂れたる「麻績王」の序は、流離する男が麻績王であることを暗示するようでもある。いずれにしても、「阿胡」は流離の歌枕であった。答志も麻績王が水路をとれば通過する土地であり、流離の歌枕であったのだらう。

人麻呂は、留守歌のかたちを借りて、志摩の海浜で遊ぶ女官たちに対し、羨望とともに一沫の不安を美しくうたおうとした。留守歌の形式を採用したために、難所がうたいこまれねばならず、難所はたんなる難所ではなく、羨望を誘うものでなければならなかったために、甘美なイメージを読者に喚起させる流離譚に登場する流離の歌枕が選択されたのであらう。第一首・第二首が明るい憧憬や羨望のなかで、かすかに伝えようとする「波に濡れはしないか」「うまく玉藻が刈れるか」といった一沫の不安や、最大の不安をかもし出す伊良湖岬の地名は、麻績王の歌「うつせみの命を惜しみ波に濡れ伊良湖の島の玉藻刈りをす」がすでに所有するものであり、すべてはこの歌より再生産したものであった。

阿胡・答志・伊良湖の地名は、それぞれに添えられた「浦」「崎」「島」と呼応しながら、内から外に向い、次第に憂愁や不安を増す流離の歌枕であり、実際の所在とは無関係に、『留京三首』の世界においては、一直線上に置かれた地名であった。女官

をうたいながら、彼女が「をとめ」「大宮人」「妹」と変化するのも、波に玉藻を濡らす女官の若さや美しさをいうために「をとめ」といい、玉藻刈る海人のしわざを盛装した女官が行ったことを表現するために「大宮人」といい、難所に来た女官たちへの憂慮をいい、彼女たちへの愛を表明するために「妹」といったのである。人麻呂はこうした心づかいをする歌人である。

第一首の「網の浦」は、志摩の中心地でしかも流離の歌枕である「阿胡の浦」が正しい。なぜ、「網の浦」になったかは臆測するほかはないが、行幸に供奉して志摩の地理に詳しくなった文学を解さない高官などから、伊良湖には阿児からは行かない、などとたびたびいわれ、第二首に使用しているので「答志の浦」ともいえず、苦しまぎれに、どこにでもありそうで、いずれの地方のひなびた海浜にも使用できる「網の浦」を、軍王が「網の浦の海人をとめらが焼く塩の思ひぞ焼くるわがした心」(一―五)とうたっているのを理由にして改め、地理に詳しい高官は、人麻呂の心も理解できずに、こんどは一直線になった、といって喜んだ、といったところか。

人麻呂は、行幸に供奉せず、女官たちの旅を羨望する留守の官人の心をうたった。留守歌の発想を採用したので、私的な抒情を獲得しているが、妻の旅を私的にうたったわけではない。伊勢が曾遊の地であったかいか、妻が女官たちのなかにいたかいか、は明らかでない。読者を予想した作品で、文芸性はきわめて高く、直接的ではないが、うたいこまれた羨望により、行幸を賛美する歌ともなっている。